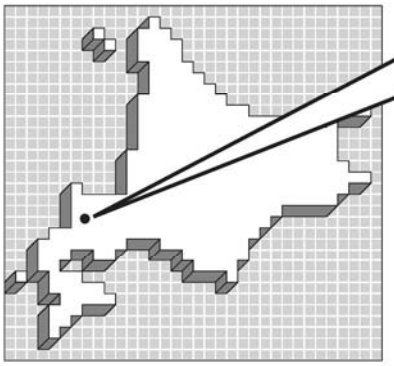
連載　わがマチの自慢　No.20



共　和　町

”らいでん”ブランドで知られる かかしの里

共和町は後志総合振興局管内の北西部、積丹半島の付け根に位置している。西側の岩内町と北西側の泊村との町境の間には延長四・五㎞ほどの海岸線を有し、岩内湾に面しているほかは三方を山に囲まれており、特に、南部の町境周辺にはワイスホルンやチセヌプリなど、標高一、〇〇〇メートル級の山々がそびえている。このニセコ山系には、最も美しいと言われる「神仙沼」をはじめ多くの湖沼がある。周辺には自然休養林があり、大沼や長沼、数多くの湿原の植物が見られる大谷地が点在しており、特に紅葉の時期には多くの観光客で賑わうという。

まちの中央を東から西に流れ、日本海に注ぐ堀株（ほりかっぷ）川の沖積地帯に扇型に農耕地が広がっている。安政四（一八五七）年に、江戸幕府が直轄の開墾場として御手作場（おてさくば）を幌似地区と発足（はったり）地区に設けたのが、共和町の開拓のはじまりとされている。農業が基幹産業で、古くからの米どころであり、スイカやメロンの代表的な産地として知られている。

昭和三〇年に発足村、前田村、小沢村が合併して共和村が誕生した。共和の名前には、三地区の住民が〝共〟に力を合わせ、〝和〟をもって発展していこうという願いが込め

られている。昭和四六年に町制を施行。多くの道内市町村と同様に人口減少が進んでおり、昨年九月末の人口は五、九一一人と三村合併当時の四割になっている。

かかしの里

かかしは豊かな田園が広がる共和町のシンボルである。

町内に入るとかかしをイメージする街路灯が目に入る。また、役場庁舎のデザインもかかしをモチーフにしたものだという。

◀御手作場の碑、背後は役場庁舎

▼かかし祭

毎年八月下旬には二日間にわたって「共和かかし祭」が開かれる。この祭りは、「共和産業まつり」として昭和五六年から始まり、昭和六〇年の第五回目からこの名称に変更している。メインのイベントはかかしコンクールで、町内外から一〇〇体近くの手づくりの力作が並び、その出来栄えを競う。かかしゲタ飛ばし大会や歌謡ショー、草ばん馬、スイカやメロンの即売会などもあり、子どもからお年寄りまで参加でき、町民の連帯感を育む催しである。今では町内外からおよそ三万人が訪れる大きな祭りになっている。

役場の近くには、共和町の歴史や文化を伝える郷土資料館である「かかし古里館」がある。

常設展示室と収蔵展示室があり、常設展示室には、かかし祭で表彰されたかかしが展

示されているほか、共和町の自然や行事、鉱工業の変遷などを紹介している。収蔵展示室は、昭和五七年に廃校となった旧幌似小学校の木造校舎を、昭和八年の開校当時のままに修復し展示室として活用している。ここには、開拓初期に使われた農機具や生活用品などが展示されているほか、昭和初期の教室の様子を復元したコーナーもある。

農業の概要

共和町の農業は、水稲とスイカやメロン、スイートコーンなどの野菜や小麦・バレイショなどの畑作物を組み合わせた複合経営が営まれている。町の総土地面積の一七％が耕地（五、一二〇ha）であり、田と畑の面積が概ね半分ずつとなっている。作付面積では、水稲が最も多く一、五二〇ha、そば（四七八ha）、小麦（四二七ha）が続いている。特産のスイカとメロンは合せて三三〇haほどだが、年々減少傾向にある。販売農家戸数は一〇年前に比べ一一〇戸減少（減少率二四％）し三四九戸。販売農家の平均経営耕地面積は一一haで後志管内としては平均的な規模であるが、北海道平均からみると半分以下で小規模である。農業産出額の七割近くをメロンやスイカ、スイートコーンなどを中心とした野菜が占めており、収益の柱となっている。次いで米が四分の一を占めている。

平成一二年に、町内の前田、発足、小沢に隣接する岩内を加えた四農協が合併し、現在のきょうわ農協が誕生した。

表　共和町農業の概況

項　目		単位	共和町	資　料
総土地面積		ha	30,491	2015農林業センサス
耕地面積		〃	5,120	農林水産省「耕地面積調査」（平成29年）
うち　田		〃	2,570	
畑		〃	2,550	
販売農家戸数		戸	349	2015農林業センサス
うち専業		〃	210	
第１種兼業		〃	86	
１戸当たり経営耕地面積		ha	11	
作付面積	水　稲	ha	1,520	農林水産省「作物統計」（平成29年）
	小　麦	〃	427	
	大　豆	〃	236	
	そ　ば	〃	478	
	スイカ	〃	100	JAきょうわ調べ（平成29年）
	メロン	〃	230	
農業産出額		千万円	688	農林水産省「平成28年市町村別農業産出額（推計）」
耕　種		〃	688	
うち　米		〃	166	
（米の割合）		（%）	（24.1）	
野菜		千万円	464	
（野菜の割合）		（%）	（67.4）	

〝らいでん〟ブランドを代表するスイカとメロン

らいでんブランドはスイカやメロンの成功によって評価を得てきたが、今では米をはじめスイートコーンや馬鈴薯など、農協が扱う農産物を「らいでん」銘柄に統一している。今年は新たに長ネギもらいでんブランドの仲間入りをしている。

スイカの本格栽培は昭和三〇年代後半に始まった。昭和三八年に、発足地区の青年農業者グループ「みのる農事研究会」の会員が、スイカのビニールトンネルによる促成栽培を試みたところ、品質の良いものができたうえ、他の産地よりも早く出荷できたことから高い評価を得た。この成果が地域に広がり、翌年秋には、四〇人を超える生産者が発足青果物生産出荷組合を設立し、生産が本格的にスタートした。昭和四〇年代にはメロンの本格栽培も始まり、農協をはじめ普及組織や試験場など関係機関とよく連携しながら、一元集荷販売体制の整備、栽培品種の統一や栽培法の検討、土づくりの推進などに組織を挙げて取り組んできた。

連作障害対策として、スイカ・メロンと、土壌病害を抑える効果がある長ネギを混植して栽培する独特の方法を導入したほか、緑肥や堆肥の投入などを進め、化学肥料や化学農薬の使用を抑えるクリーン農業を推進してきた。らいでんスイカ生産組合は、YES！clean表示制度の登録集団になっている。また、畑地かんがい施設の整備やハウス栽培の導入によって出荷期間を拡大するなど、長期安定出荷に努めてきた。

メロン圃場

品質管理面では、全国の産地に先駆けてレーザー光線を使った非破壊糖度測定装置を備えた選果施設を整備、その後も機械装置を更新するなど、外観上の品質に加えて空洞や糖度等の内部品質を一個一個測定、消費者に届くまでのトレーサビリティシステムも導入して品質管理を徹底し、市場や消費者のニーズに応えてきた。

平成に入ってからは、メロンの作付けがスイカを上回るようになった。平成二九年度の農協の販売取扱高はスイカが約八億円、メロンが約二一億円と、この二品目で全体の概ね五割を占めている。また

選果施設

選果施設画像センサー

出荷先は、スイカは道内が八割、道外が二割と道内中心に販売しているのに対して、メロンは道外が七割、道内が三割と全国へ出荷しており、三万玉ほどは香港に輸出している。

ブランド価値の向上に町の支援

町では農協と連携して、安全・安心で高品質な農産物を生産・供給するための施策を講じている。米の調製貯蔵施設やメロンの集出荷選果施設は、町が事業主体となって建設し、農協が指定管理者となって運営している。町内には畜産農家がほとんどいないことから、町外からのバーク堆肥や鶏糞の購入、緑肥種子の購入、心土破砕の施工費用に対して助成し、土づくりを推進している。また、安定生産・出荷対策としてビニールハウスやジャガイモの被覆資材の購入に、スイートコーン面積拡大対策としてトンネル支柱の購入に助成を行っている。さらに、町の農業開発センターでは土壌分析・診断に加えて、スイカやメロン、スイートコーンの品種比較試験や、特に近年では、管理作業の省力化を探る試験に力を入れている。これらの対策は長い期間継続して行われている。

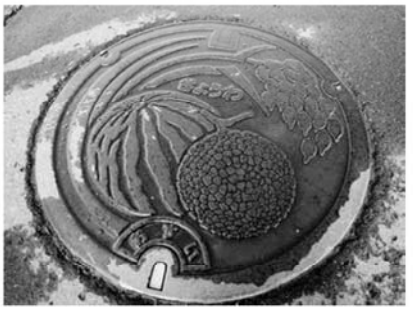
らいでんスイカの初セリ

大手メーカーから〝らいでんメロン〟の加工品が発売

一昨年末、町が平成二九年の「共和町五大ニュース」を町民から募集したところ、らいでんメロンの果汁を材料にした飲料やお菓子が全国的なメーカーから販売されたこと

が第一位となった。従来から農協が「らいでんメロンゼリー」を委託製造・販売していたが、大手のメーカーもらいでんメロンに注目している。

アサヒ飲料株式会社は、日本各地の特産果実を厳選して使用した炭酸飲料である「特産三ツ矢」シリーズにらいでんメロンを採用し、一昨年「特産三ツ矢　北海道産らいでんメロン」を販売した。キリンビール株式会社は、定番のブランド「氷結」シリーズから、らいでんメロンのストレート果汁を使用した「キリン氷結　北海道産メロン（限定出荷）」を発売している。季節限定商品ではあるが、一昨年と昨年2年連続しての販売となった。和洋菓子やパンの製造販売を行っている株式会社もりもと（本社千歳市）では、クッキー系の洋菓子「北の散歩道シリーズ」と「太陽いっぱいゼリーシリーズ」にらいでんメロンを使っている。こうした話題は、特に後継者に対するアピールとなり、らいでんブランドに対する誇りや生産意欲の向上につながるものであろう。



稲穂・スイカ・メロンが描かれたマンホール

つながる農業後継者の活躍

スイカやメロンの本格栽培のきっかけは、後継者を中心としたグループである「みのる農事研究会」のトンネル栽培の試みであった。時を経て一〇年前、みのる農事研究会メンバーの後継者もいる青年農業者グループ「Ｇｒｏｗｕｐ（グローアップ）」が設立され、スイカやメロンと並ぶ新たな特産品をつくろうと、ヨーロッパ研修の時に現地で印象に残った野菜を栽培し、年に数回地元で直売するなど消費者との交流を進めている。また、学校給食への食材提供や提供農産物の説明など小学生の食育活動にも協力している。

近年は４Ｈクラブの活躍も光る。共和町４Ｈクラブは昭和四九年に、栽培技術の向上や仲間づくりを目的に立ち上げ、農業改良普及センター等の指導を受けながら、各種のプロジェクト活動や交流活動に取り組んできた。平成二八年度からは、クラブ員の関心が高く、労働負担の増加や収益性・市場性の低下を招いている「メロンの果実の底に小さな穴があいてへこむ障害果（通称：尻上がり果）の発生実態の把握とその対策」をテーマとするプロジェクト活

動に取り組んできた。昨年度の全道青年農業者会議で、後志地区の代表として二年間のプロジェクト活動の成果を発表し、園芸・特産作物部門で最優秀賞を受賞した。

最優秀賞の受賞は、平成一四・一五年度の連続受賞以来一四年振りとなった。

町としても、農協や農業改良普及センターなどの関係機関と構成している「共和町農業後継者対策協議会」の事業を支援するなど、農業後継者の育成に力を入れている。就農時には激励会を開催し、就農祝い金を支給しているほか、先進地の視察研修、土壌分析やフォークリフトの資格取得講習会など各種研修会参加費用の助成などを行っている。また花嫁対策として、婚活情報誌と連携し、主に札幌圏の独身女性を町内などに招き、農業青年が企画運営を担って、夏は果菜類の収穫体験とボーリングや夕食会などの交流事業、冬は婚活パーティを行う「らいでん農コン」を実施している。

メロンやスイカなど集約的な作物を特産とする共和町では、担い手の高齢化に加え、熟練した雇用労働者の高齢化も進んでおり、作付けを維持するうえで大きな課題となっている。今後も農家戸数の減少が進み、一戸当たりの経営規模の拡大が見込まれる中で、農作業の省力化や効率化に向けて地域ぐるみで取り組んでいくことが、担い手や雇用労働力を確保する上でも重要となろう。

〈取材後記〉

◆二つの謝恩碑◆

取材に備えて資料を集めている中で、この地域の農業振興に貢献のあった二人の研究者の謝恩碑（記念碑）が町内にあることが分かった。二つの謝恩碑は役場近くの河川敷公園に並んで建てられていた。

一人は伊藤誠哉先生（明治一六年～昭和三七年）だ。碑文には「先生は植物病理学者。当時本道未曽有の稲熱（いもち）病発生に際し、昭和八年根拠地を本村に選び自ら指導に当たられ、此の地方の米作を救われた恩人である。」（句読点及びふりがなは筆者）とある。

先生は、大正から昭和初期にかけて道内にまん延したいもち

伊藤誠哉先生記念碑

病の総合防除法を確立され、大学、農事試験場、行政、農業者等が一体となった防除の取り組みを指導し成功に導かれた。実験室や試験田での成果を、集落ぐるみの実際の水田で確認し、その効果を展示するために「防除集落」を設けることとし、その一つとして昭和八年に指定されたのが、旧発足村水松澤（おんこのさわ）であった。北海道地域農業研究所が平成二五年に刊行した「新北海道農業発達史」には、当時の防除法の確立から現地への普及の取り組みに対して、「今日の産学官提携のモデルともいうべき取り組みがこの時期に大きなスケールで行われていたことは注目されてよい。」と記載されている。

もう一人は島善鄰（よしちか）先生（明治二二年～昭和三九年）である。碑文には「先生は我が国園芸学の権威であるが、特に後志・岩宇及び山麓地方の不振を憂い、岩宇園芸試験地の設置に尽力し、自ら率先して馬鈴薯浴光催芽栽培技術の普及にあたり、更に砂丘地防風林の設置と土地改良の必要性を提唱し、西瓜、メロン、百合等の改良を指導してこの地方の特産物たらしめるなど、この地方の振興に力をいたされた。」とある。岩宇園芸試験地は道立の試験地として昭和二七年に設置され、昭和四六年に廃止されている。

島義鄰先生謝恩の碑

また、先生は近代的なリンゴ栽培の基礎を築かれ、リンゴの研究と普及に一生務められるなどリンゴの神様といわれた。北海道大学の余市果樹園には島先生と恩師の星野勇三先生の功績を称える碑が、リンゴ農家の人たちの志により建立されている。

二人の研究者をはじめ多くの先人の苦闘と努力の積み重ねのうえに、今日の共和町農業・らいでんブランドがある。先人への敬意と感謝の念を次の世代にしっかりとつなぎ、共和町農業のさらなる発展に向けて一丸となって取り組んでいこうという決意が謝恩碑建立に込められている。

◇　◇　◇

共和町役場やきょうわ農協のみなさまには、取材の対応、資料や写真の提供、原稿の確認など多くのご協力を頂きました。心からお礼申し上げます。

一般社団法人北海道地域農業研究所
特別研究員　三津橋　真　一